

（あ、そっか。さっきまで静雄さんと一緒にいたのがわかったんだ）

帝人自身は相変わらずよくわからないが、また静雄の香水が移っているのだろう。今回は頭を撫でられたりはしなかったが、そこそ長時間一緒にいた。

確かに、もしも静雄をこの部屋に招いて、臨也の買ったコーヒーマーカーを使つたならば、きっと静雄は縁起が悪いから使うな、くらいのことは言うだろう。そんな未来は予定していないが、想像して小さく笑つた。

「そう言う訳じゃないですけど」

「なに、その笑い。気に入らないな」

告げる表情は歪んでいる。いつも余裕あふれる臨也らしくない。どうしたんですか、と尋ねようとして失敗した。口を開く前に、どん、と大きな衝撃が体を襲う。気がつけば、床が背にあり、自分が臨也に押し倒される形になっている。

「え、ちよっ……」

「俺からシズちゃんに乗り換えるつもり？」

告げられた問いに、ぎゃふん、と思つた。

（いやいやいや、なんで男から男に乗り換えるんですか。僕には男しか選択肢がないみたいじゃないですか！）

確かにうっかり臨也に恋はしたが、本来帝人の好みは正常だ。異性だ。なので次に恋するには時間がかかるにしても、たぶんきっと女性のはずだ。そうに違いはない。

というか、乗り換える、という言葉がまずおかしい。

恋人ごっこが終わつたのは臨也が飽きたからだ。彼がそう言わなくても終わるつもりであの日逢つたけれど、ともかく結果としては彼から望んだ別離だったのに。

「や、ちよつと、……何……つ」

臨也の指が、帝人の弱い部分にふれていく。そうされてしまうと、どんな抵抗する力が弱まり彼をふりほどけない。……元々、そもそも彼に腕力でかなうはずもないのだから。

「嫌、や……つ」

叫ぼうとする口を彼の唇で塞がれる。それから閉じようとしても、もう遅い。口腔を彼の舌が占領し、存分に嬲られるしかなかった。

（やば、……つ）

このままだと、流される。自分はすぐに何も考えられなくなってしまうだろう。今までのように。

「ヤだ……っ！」

そんなのは嫌だった。だつてもう、違うのに。今までとは、何もかもが違うのに。もう恋人ごっこは終わった。それなのに。

「嘘つきだなあ。嫌じゃない癖に」

嘲笑う口調で臨也が言う。それは真実なのだろう。帝人の身体は簡単に臨也によつて教えられた快樂に弱い。けれど、抗うことを諦めることはできない。どうしても嫌だった。臨也にとつてはこれも遊びの一種なのだろう。彼にしてみれば、きっと帝人の感情など遊具にすぎない。